

100年前、群馬から「非戦論」を発信した 柏木義円

—「第13回 群馬の歴史を考える会」を開催して—

関口 荘右^{そうすけ}（群馬県立文書館）

はじめに

2012年3月24日、前橋市総合福祉会館で「第13回 群馬の歴史を考える会」が開催された。今回は私が所属する群馬県歴史教育者協議会の諸事情により、「ぐんま教育文化フォーラム」の方々にお世話になり共催という形にさせていただいた。

今回のテーマは、「100年前、群馬から『非戦論』を発信した柏木義円」で、日露戦争から満州事変にいたる、近代日本の戦争に対し、人間の尊厳と世界平和への願いから、「非戦論」を群馬の地から発信し続けた安中教会牧師・柏木義円を取り上げ、学ぶというものであった。

今回の報告（研究発表）は2本で、岩根承成先生（前橋国際大学講師）の「柏木義円の非戦論と近代日本の戦争」と萩原慧先生（非戦の願いをつぐ安中・松井田の会）の「柏木義円と安中の青年たち」であった。岩根先生の報告レジュメは、昨年3月27日に実施した本会の第4回フィールドワーク（安中・富岡方面の史跡を訪ねる）の資料「非戦論者『柏木義円』と自由民権『群馬事件』を訪ねる」の一部を今回のテーマに沿ってさらに具体的にわかりやすく記述されたものであった。また、萩原先生には、昨年12月下旬、安中市磯部温泉で開催した歴史教育者協議会関東ブロック群馬大会で、同様のテーマで発表していただき好評を得たものをさらに発展させたものであった。私は大会当日、事務局の仕事で忙しく、残念ながら先生の御発表を拝聴することができず、今回はたいへん楽しみであった。

ここでは、御二人の発表の概略と私の若干の感想などを記させていただきたい。

1 岩根報告「柏木義円の非戦論と近代日本の戦争」について

岩根先生の報告内容は、Ⅰ 柏木義円の略歴、Ⅱ 『上毛教界月報』誌上において表明した「非戦論」、Ⅲ 近代日本の戦争と群馬、という構成であった。



先生は、Ⅰで1860（万延元）年、越後国三島郡与板（現新潟県長岡市）での義円生誕から、①群馬へ赴任→京都同志社へ→再び群馬へ、②再び京都同志社へ→一時熊本へ赴任→京都同志社へ復帰、③日清戦争開戦・終わる、④以後 群馬県安中において牧師活動に専念、⑤日露戦争開戦・終わる、⑥第一次世界大戦 日本参戦と終戦、⑦満州事変勃発—「十五年戦争」の始まり、⑧日中戦争始まる、そして1938（昭和13）年79歳の死去までを『上毛教界月報』等の史料をもとに解説された。この中で先生は、上記③の日清戦争期、義円が『同志社文学雑誌』に日清戦争への「主戦論」を展開したことを紹介された。

また、義円の主張で大事な点として、④の時期、日露戦争反対の「非戦論」発表（非戦論・国是論）、⑤の時期の「戦争に対する吾人の態度」、「平和主義は最大の慈善事業な

り」発表、⑥⑦間の「殺す勿れ」発表、⑦の時期の「宜しく満州の駐屯兵を撤す可し」発表などを挙げられ、Ⅱで『上毛教界月報』原文を引用され、具体的に解説された。つまり、義円の主張は、**日本国憲法**の「前文」の一節（「われわれは、**全世界の国民**が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、**平和のうちに生存する権利**を有することを確認する。」）と「第9条」（戦争放棄・戦力不保持・交戦権否認）の理念と共通するものである、とまとめられた。

Ⅲでは1. 「戦地人民の悲惨は 言うに堪えざるものあり」、2. 日露戦争「莫大な軍費と増税は**将に国民**の生活を圧迫せん」、3. 「日本新聞紙の報道が、往々に悉く信じ難くなる」—マスコミは どのように伝えたのか—などについて、『新編高崎市史』や『上毛新聞』などの史料をもとに解説された。

2 萩原報告「柏木義円と安中の青年たち」について

萩原先生は、（一）西毛基督教青年会の結成と活動、（二）中島治平と義円、（三）長



加部寅吉と義円、（四）須田清基と義円、という4項目からなるレジュメと、『上毛教界月報』から引用・作成された「資料集」をもとに、ユー

モアをまじえて話された。

先生は、（一）で①田舎牧師・義円の人柄や伝道（巡回訪問）について、②1902（明治35）年8月に西毛基督教青年会が設立されたこと、③同年9月、結成集会・第1回学術講演会が開催されたこと、④西毛基督教青年会

に対する義円の抱負、⑤1902～1911（明治44）年の間に11回の講演会と9回の懇談会が開催されたこと（講師は安部磯雄、木下尚江、島田三郎ら著名人）、⑥明治末の同会の会員数は65名（正会員62名、名誉会員3名）で、会員の職業は農業、養蚕業、蚕種業などだが、特徴として小・中学校教員が多数いたこと、などについて解説された。

（二）では、①中島治平の略歴、②中島治平の戦地からの手紙、③義円の「教友中島君の書状に就て」、④長加部寅吉の追悼文「我友中島^(マモ)次平君を偲ぶ」、⑤中島治平の村葬に対する義円の見解、⑥揺れ悩む義円、などについて説明された。（三）では、①長加部寅吉の略歴、②1908（明治41）年、皇太子行啓に際し長加部寅吉が安中警察署警察官に監視された際の義円の抗議文「敢て神山知事に問ふ」などを取り上げられ、（四）では、①須田清基の略歴、②須田清基の軍籍離脱届、③軍籍離脱問題における須田清基と義円の関わり、などについて史料をもとに述べられた。

まとめにかえて

私は、御二人の先生方が長年にわたり柏木義円や近代日本の戦争に関する原史料にじっくり取り組まれ、丹念に調べあげ考察されている研究姿勢に感銘を受けた。私もこれから地道に史料調査（近世）に取り組み、これはという史料に（研究テーマに）ぜひめぐり会いたいと思った。岩根先生は、理路整然とわかりやすく、萩原先生はユーモアたっぷりに情熱的に語りかけてくださった。御二人とも、日頃の研究に裏付けられた自信に満ちあふれた語り口が印象的であった。

柏木義円については、越後国の生まれとはいえ、安中に根を張って活動し「非戦論」や『日本国憲法』の精神を先取りした思想をもって、彼を群馬県人はもっとよく知り、学ぶべきではないかと思った。